

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## ローマ滞在日記③ ＊リガブーエ来日公演の裏話＊

二宮 大輔

あれは昨年(2014年)の11月のこと。ローマに住む友人クラウドイオから、京都に住む私のもとに、一通のメールが届いた。なにやら仕事の話らしい。「今すぐ話がしたいから、時間ができたらパソコンでスカイプを開いてくれ」という手短な内容だった。彼に限らずこの手の話はよく持ちかけられる。「いい仕事があるんだけど、一緒にやらないか?」と意気揚々と電話してきたはいいが、数日後には、先方に断られて仕事自体が立ち消えになるという類の話だ。仕事内容は、映画のキャスティングだったり、業務翻訳だったり、観光アテンドだったり。さて、スカイプを開いてクラウドイオと話してみると、今回の仕事は音楽に関するものだった。「リガブーエが日本でライブをする。コーディネートを頼まれたから手伝ってくれ」とのことだ。

リガブーエ? あのリガブーエだろうか? ラジオでもよく耳にするイタリアで大人気のロック歌手。1990年にデビューして以来、今までに出した10枚のオリジナルアルバムはどれも大ヒット。2009年には古代ローマ時代の円形闘技場跡アリーナ・ディ・ヴェローナで10日連続ライブを行い、連日超満員にした。そんな大物と話をつけることができるものか。これはまさしく立ち消え濃厚な話ではないか。その時は「(どうせ立ち消えになるだろうし)クラウドイオがやりたいなら手伝ってもいいよ」というやや受動的な返事をして、スカイプを閉じた。だがこの受動的な態度が、この後すぐ、予期せぬ事態を導いてしまう。結論を先に言うとりガブーエは日本に来てライブを行なった。私はそれに付き添い、またとない経験をさせてもらったので、その顛末を公表できる範囲で書き留めておきたい。だ

が、その前に私に仕事を持ちかけてきたクラウドイオとは何者なのかを簡単に説明しておこう。

私とクラウドイオが出会ったのはもう六年前のこと。場所はローマ市内のオスティエンセ通りにある小さなライブハウスだった。彼は出演者で私は観客。当時クラウドイオは日本人の女の子と付き合っており、その彼女を介してライブに誘われたのだ。いや、「一度イタリアのライブハウスに行ってみよう」と、私のほうから申し出たのかもしれない。とにかく、日本で学生時代、軽音サークルに属していた私はイタリアのバンドや音楽シーンに興味があったのだ。

その日は簡単な言葉を交わしただけで別れたのだが、後にイタリアでもバンド活動を始めた私は、イベントでもあるクラウドイオにライブハウスや録音スタジオを紹介してもらった。イタリアでバンドをやってみると、良くも悪くも日本と違う部分の発見ばかりで、たいそう驚いた。例えば、日本では当たり前の子供服やノルマがイタリアには存在しない。店によっては出演者に飲み物や食べ物が提供される。基本的にドラムセットやアンプは店に備わっておらず、出演者たちがほぼ全て持ち込む。これらの発見も、元を正すとクラウドイオが教えてくれたことだ。

そんなわけで、いろいろお世話になっているクラウドイオだが、こちらがお世話することもあった。出会って間もない頃、日本でライブがしたいのだと相談を受けた。その時までは知らなかったのだが、クラウドイオの日本への執着は凄まじい。語学を勉強したわけではないが、漫画が好きでアニ

メが好き。何度も旅行で日本に来ているらしい。その想いが高じて、この度、日本ツアーを行う決意をしたという。旅行ビザで滞在できる最長期間である三ヶ月の間に、東京を中心にできる限りライブを行いたいらしい。そのために、日本語で曲を作りたいというのが相談内容だ。軽い気持ちで「日本でライブがしたい」と思っているイタリア人は多いが、クラウドディオは筋金入りだ。こうして私はクラウドディオを中心としたバンド Zephiro の一曲に、日本語で歌詞を付け加えた。そして2010年、その曲を引っさげてZephiroは日本ツアーを敢行し、三ヶ月の滞在の間、実に27本のライブをこなした。日本語曲を日本人ミュージシャンと一緒に歌っている姿が動画投稿サイトにアップロードされているのを見て、私は目を細めた。



【現在の Zephiro。左端がクラウドディオ。

2013年には新メンバーとも日本ツアーを行った。】

しかし日本ツアー直後、Zephiro のメンバーは、相次いでバンドを脱退。彼らは別バンドを結成し、サンレモ音楽祭への登竜門サンレモ・ジョヴァニに出演する活躍を見せている。一人残される形になったクラウドディオは、別のメンバーを募り、マイペースに活動を再開した。そこに舞い込んだのがリガブーエ来日のための大仕事だ。彼の日本での経験が買われたわけだ。同種の仕事を増やしていきたい彼の今後のためにも、これは友人として手伝ってやらないわけにはいかない。

内に秘めた友情とは裏腹に、リガブーエのコーディネートは難航した。11月の中旬に仕事を引き受けた方がいいが、リガブーエ側の担当マネージャー・フランチェスコと全く連絡が取れなくなったのだ。2015年の2月上旬という日程を教えてもらい、候補となるライブハウスをいくつか決めたのだが、そこから話が進まない。やはりこの話も立ち消えか……と置いていたら、11月の末になって突如フランチェスコからクラウドディオに連絡が入った。大物アーティストが多数所属する事務所で働くフランチェスコは、別アーティストのロンドン公演に付き添っており、返事ができなかつたらしい。多忙なのはわかるが、何日も返事をしないのは信用できないと、私は懸念を示したのだが、クラウドディオは俄然やる気だ。やはりイタリア人にとって、リガブーエのネームバリューはあまりにも大きいようだ。

そんなフランチェスコとのやりとりが二、三回繰り返され、ようやく詳細が決定した。クラウドディオが2010年のツアーで知り合った東京のライブハウスの店長・鷲山さんに紹介してもらった高田馬場の CLUB PHASE (クラブ・フェイズ) が会場。公演日は翌年の2月3日だから、すでに二ヶ月を切っている。こうなると今度はフランチェスコのほうからクラウドディオに連絡が止まらなくなった。要件は「早くチケット販売を始めてほしい」。ついには「今日中にチケット販売を開始しないと東京でのライブは取りやめる」とまで言ってきた。再び鷲山さんに無理を言って、急遽プレイガイドで先行発売を始めてもらうことになった。先行発売チケット数は50枚。ほとんど宣伝もしないまま始めたチケット販売なので、売れ行きが気になっていたが、なんと50枚は一日で完売。急いで日程を組んだので、一般チケットの発売まで間ができてしまうというミスを犯してしまった。足踏みしなければ、そのままの勢いでチケットは捌けたかもしれないが、一般のチケット発売を開始したのが、10日後のお正月。チケット販売は大苦戦を強いられた。それでも、知人に協力で通信社から記事を配信してもらい、FMラジオでリガブーエの曲を流してもらい、ライブ前日には同ラジオ局でリガブーエ本人のゲスト出演が決まった。クラウドディオはクラウドディオで、在日イタリア関係の機関に掛け合って、後援許可を取得した。このような、ほそぼそとした宣伝

活動が奏功したのか、徐々にチケット売り上げ枚数は伸びてきた。そこへ来て新たな問題が勃発する。

ライブ 10 日前の 1 月下旬に、フランチェスコが機材リストを送ってきて、指定する機材を寸分違わず全て揃えてほしいと言ってきた。アンプやドラム、マイクにいたるまで、類似品ではなく、指定されたそのものでないと許されない。これが困難を極めた。つまり、リガブーエの機材リストの中には、ヨーロッパでしか出回っていない機材が多数含まれていたのだ。これに関しては、前もって東京に到着したクラウドオと鷲山さんが、ライブ前日まで東京中を駆けずり回ってかき集めてくれて、なんとか事なきを得た。しかし何から何まで直前になって注文してくるのがイタリア人らしい。



【Ligabue Tokyo公演チラシ】

ライブ当日は私も東京に行き、準備を手伝ったのだが、初対面のフランチェスコとイタリア人スタッフたちから、機材を運ぶバンを用意してほしい、ライブの後に打ち上げを行うレストランを予約してほしい、演者とは別にスタッフ用に楽屋を用意してほしいなどなど、これまでも増して、さまざまな注文をつけてくる。14 時にライブ会場入りして、あれこれ動き回り続けて 20 時に開演。すっかり疲弊した私は、観客で満員になった会場の最後列でライブを鑑賞したのだが、少ししゃがれた声の特徴のリガブーエとそのバックバンドの演奏は、本

当に素晴らしかった。小さなライブハウスとは思えないほど大きくて良質な音が出ていたのは、頑張っ揃えてもらった機材のおかげだろうか。ライブが無事に終演すると、あれだけ文句とわがまを言っていたイタリア人スタッフたちがニコニコ大満足でホテルに帰っていく。フランチェスコも大喜びで、クラウドオと私に何度も何度もお礼を言った。

美談に聞こえるかもしれないが、リガブーエという大物アーティストの来日公演の内幕は、私や鷲山さん、クラウドオとの、仕事ではなく、友人としてのつながりで乗り越えた部分が多かった。苦勞に見合う報酬がもらえたかと問われれば首をかしげるしかないが、今回学んだノウハウは今後も活かせるはずだ。なにしろ、日本公演の成功に味をしめたフランチェスコが、また次なる大物アーティストを日本に連れてくると言っている。まだまだ口約束の段階だが、こういった類の話が決して立ち消えるばかりではないことは、今回の一件で立証されている。今後、日本でのイタリア音楽の発展に大いに期待したい。

(元当館語学受講生)

### ～会館だより～

#### イタリア語 無料体験レッスン

2015 年 4 月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

3/31(火) 11:00～12:30 4/4(土) 11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

3/30(月) 19:00～20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

3/30(月) 19:00～20:30 4/2(木) 11:00～12:30

#### スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

4/4(土) 11:00～12:30

#### ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

4/8(水) 14:00～15:30

## \*カルヴィーノとアーティチョーク⑩

### 龍とカルヴィーノ(1)\*

堤 康徳

中国では古来、龍は鱗虫(蛇などのうろこのある動物)の長であり、麟、鳳、亀とともに四瑞(四靈)のひとつとされてきた。また仏教においても、龍は守護神として尊ばれてきた。京都の妙心寺や建仁寺など、禅宗寺院の法堂の天井に龍が描かれているのは、その表れである。禅寺の法堂は、住職が仏法を説く、七堂伽藍のなかで最も重要な場所であり、龍はその守護神なのだ。雲を呼び雨を降らす龍神は、法堂に法の雨を降らせ、火災からも守るといい伝えられる。つまり中国や日本において、あくまでも龍は聖獣であり、神獣だといえよう。



【妙心寺 法堂天井 雲龍図】

一方、西洋における龍のイメージはどうだろうか？ ラテン語の「龍」draco は、「蛇」を意味するギリシア語の drakon に由来する。西洋絵画のなかの龍は、京都の名高い天井画の龍とはかなり形状がことなる。ヨーロッパの龍は、翼とともに描かれることも多いが、むしろ巨大なトカゲあるいは恐竜に近い。西洋絵画において最も目にする機会の多い龍は、聖ゲオルギウス(イタリア語では San Giorgio)に退治される龍であろう。ラッファエッロ、ウッチェッロ、カルパッチョなど、多くのイタリア人巨匠たちがこの題材の絵を描いている。美術史家の尾形希和子さんの著書『教会の怪物たち——ロマネスクの図像学』(講談社、2013年)には、キリスト教文化における龍の表象についての、

たいへん示唆に富んだ記述があるので、引いておこう。

ドラゴンは、むしろ「自然」の権化として、人間によって征服されるものであった。だから、聖ゲオルギウスとドラゴンの戦いは、何よりも「人間」対「自然」の戦いであり、最後には必ずドラゴンは退治され、自然は人間によって制御されるのだ。

「耕作」と「文化」が同じ cultura という言葉で示されるように、人間が自然に働きかけ、開墾し、都市を形成していくことこそが文明であった。ゲオルギウスに限らず聖人と戦うドラゴンや巨大な蛇は、人間が森林を切り開き開墾する遥か以前から土地に住み着いていた、「土地の靈」<sup>ゲニウス・ロキ</sup>が悪魔化された姿なのだ。こうしてドラゴンはもっぱら悪魔に結びつけられたものとなる(p. 240)。

西洋の絵画だけではなく、文学においても、龍は神獣どころか、もっぱら悪の化身、あるいはサタンの象徴ともいうべき存在である。『ヨハネの黙示録』にはすでに、ミカエルとの戦いに敗れて天から落とされた、「巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンと呼ばれるもの、全人類を惑わす者」(第12章9節)という記述がある。聖書のこの一節からも、龍と大蛇、そして悪魔が同一視されていることがわかる。

『神曲』には龍(draco または drago)が、地獄篇第25歌と、煉獄篇第32歌において、あわせて二度登場する。地獄篇の龍は、ヘラクレスの家畜を盗んだケンタウロスのカークスの両肩に翼を広げて座っており、向かって来る者は誰であれ、火炎を浴びせるのだ。

一方、煉獄篇の龍は、地上樂園でベアトリーチェとともにいるダンテの目の前に現れる。ここでベアトリーチェは、ダンテに、グリフォンに引かれて出現した凱旋の戦車(第29歌)に目を凝らし、見たことを現世に帰ってから書き記すように命じる。鷲の頭と翼、ライオンの胴と手足をもつグリフォンは、神性と人性をあわせもつキリストの象徴であり、戦車は、カトリック教会の象徴である。ダンテが見たのは、一連の寓意によって示される、教会

の歴史そのものである。たとえば、鷲と狐による戦車への襲撃はそれぞれ、ローマ皇帝によるキリスト教への迫害と異端を表している。では、地底から現れて戦車を尾で突き刺す龍はなんの寓意なのか？ まずその一節を読んでみよう。

私の目の前で、大地が両輪のあいだで裂け、  
そこから一頭の龍が現れ出て、  
戦車を尾で突き刺すのを見た。  
それから、雀蜂が針を引っこめるように、  
邪悪な尾を引き抜きながら、  
戦車の底をちぎりとり、蛇行しながら立ち去った  
(Pur.XXXII, vv. 130-135)。

古注の大半が説くところによれば、戦車の底を持ち去った龍は、キリスト教から多くの信者を奪ったイスラム教を示唆するものだという。ダンテの時代、ムハンマドの教えは、キリスト教社会を分裂させたと考えられていたのだ。

それにしても、非キリスト教徒の東洋の一読者としては、同じ伝説上の生き物ながら、聖獣のグリフォンと悪魔のドラゴンとのあいだの、大きなイメージの落差に驚かざるをえない。

では、伝承文学において、龍はどのように語られているだろうか？ カルヴィーノの編纂した『イタリア民話集』を読んでみよう。「七頭の龍」(*Il Drago dalle sette teste*)および、「龍と魔法の牝馬」(*Il Drago e la cavallina fatata*)という話が収録されている。

前者の原テキストは、ゲラルド・ネルッチ編纂の民話集(*Sessanta novelle popolari montalesi*, raccolte da Gherardo Nerucci, Firenze, 1880)に収められた「七頭の魔法使い」(*Il Mago dalle sette teste*)である。採集地は、ピストイア県モンターレ村。カルヴィーノは、この民話に付した注において、原テキストの Mago(魔法使い)という言葉を、より正確で、より普及した Drago(龍)に置き換えたと述べている。この点については、のちほど説明しよう。

「七頭の龍」は、主筋を簡単に要約すれば、三兄弟の長男が七頭の龍を退治し、いったんはする賢い炭焼きに手柄を横取りされそうになるものの、忠実な犬の助けを得て、王の娘と結婚する物

語だといえる。結婚の祝宴のあと、長男は森に狩りに行き、魔女に塩の彫像に変えられるが、最後は、三男に救われる。

同様の物語は、ヨーロッパおよびイタリア全域に広く伝わっている。たとえば、『グリム童話』の「ふたりの兄弟」(KHM60)がそうである。双子の弟が動物たちに助けられて七頭の龍を退治し、王女と結婚する。その後、弟は魔女によって石に変えられるが、兄に救われるのだ。

「龍と魔法の牝馬」は、ピサに伝わる民話である。子供のいない王と王女がようやく子供を授かる。しかし占星術師たちは、王子が20歳のとき妻をめとり、すぐに妻を殺さなければ、王子は龍に変身すると予言する。20歳をまぢかにひかえた王子は、イギリスの女王に求婚する。イギリスの女王には、言葉を話す牝馬がいた。牝馬は女王の最良の友でもあった。魔法の力がそなわる牝馬は、すべてを察知し、女王を救うため一計を案じる。結婚式の当日、王子が二十歳になる直前に、牝馬は女王を背中にのせて逃げ去ったのだ。このため、予言どおり、王子は龍に変身する。別の王子と結婚して双子を産んだイギリスの女王の前に、再びこの龍が現れるが、牝馬が龍を打ち倒す。龍は死に、牝馬は魔法が解けて美しい夫人に戻る。

『イタリア民話集』には、もうひとつ龍の登場する昔話が収録されている。カラブリア地方の「チコリを摘む三人の女たち」(*Le tre raccogliatrici di cicoria*)である。

貧しい母親に三人の娘がいた。三姉妹は天気が良ければチコリを摘みに行くのがつねだった。ある日、長女が大きなチコリを見つけ、苦労して引き抜くと、地面に穴が開いた。その穴は、龍の住む地下室につながっていた。長女は龍に捕えられ、首を斬られてしまう。次女も同じ目に遭う。三女だけが機転を利かせて窮地を脱し、さらに龍を酔わせたすきに龍の急所を聞き出して殺し、龍が隠しもっていた軟膏を塗って姉妹たちを生き返らせる。同じく生き返った王たちと、三姉妹はそれぞれ結婚する。

酩酊して殺されるこの物語の龍も、七頭の龍も、日本神話のヤマタノオロチを想起させないだろうか。イタリア民話における龍は、超自然的な力をそなえた邪悪な、成敗されるべき怪物だといえよ

う。

カルヴィーノによれば、イタリアでは、龍や魔女といった超自然的な存在が、各方言でことなり、しかも、ひとつの方言内において混同されることもあるという(『イタリア民話集』解説)。たとえば、ピエモンテ地方で魔女(masca)と呼ばれるものが、シチリアでは、母龍(mamma-draga)になり、トスカナ地方では、魔法使い(mago)と龍(drago)が混同されて用いられたという。カルヴィーノが、原テキストの「七頭の魔法使い」を「七頭の龍」に変えた理由はここにある。

カルヴィーノは「解説」のなかで、「チコリを摘む三人の女たち」の本質にかかわると思われる、きわめて興味深い事実を指摘している。カルヴィーノによれば、農民たちの世界を反映するイタリアの民話の多くは、極貧、飢餓、失業を出発点に語りだされる。そして、とりわけ南イタリアにおいて、「野草摘み」が、無数の民話の始まりのモチーフなのである。

鍋に何を入れたらいいかわからず、一家は出かける。父も母も、娘たちと、「スープの具を求めて」野原をさがしまわる。ひととき大きなキャベツ(cavolo)を引き抜くと、地下世界に通じる穴が開き、なかにいるのが、超自然的な花婿や、若い娘をつかまえてとりこにする魔女や、人食いの青髭だったりする(Italo Calvino, *Introduzione a Fiabe italiane*, Torino, Einaudi, 1990, p. XLII)。

カルヴィーノはまた、悲惨な現実が、「民話の始まりのモチーフであるだけではなく、神秘的な世界へ飛翔するための踏み切り板」だとも述べている。

ジュゼッペ・ピトレ編纂のシチリア民話集には、「昔、ひとりの野草摘み(cavuliccidaru)がいた」と語り出される昔話が2篇収められている。「愛の王」(*Lu re d'Amuri*)と「奴隷」(*Lu Scavu*)である。cavuliccidaruとは、アブラナ科の野草、cavuliceddi(イタリア語 cavolicelli)を摘む人のこと。

「奴隷」は、「チコリを摘む三人の女たち」のシチリア版である。ただし、龍の代わりに登場するのが奴隷なのだ。

「愛の王」は、アプレイウスの『黄金のロバ』(2世紀)で語られた挿話「クピド(アモル)とプシュケ」

のヴァリエーションである。野草摘みの父親に三人の娘がいる。末の娘 Rusidda(Rosina)が野草を一株引き抜いて地下世界に行き、相手が誰か知らずに愛の王と結婚する。ところが、「あなたは誰？」という禁じられた問いを発したために、夫は姿を消す。やがて愛の王の母親である龍(Mamma-dràa)が現れ、Rusiddaを食べようとしたり、息子との結婚や出産をなんとか阻もうとしたりする。Rusiddaがプシュケとすれば、母龍は、息子が愛した女に嫉妬するウエヌスということになるが、白雪姫のいじわるな継母のようでもある。最後に母龍は、Rusiddaが子供を産むと、心臓発作で死んでしまうのだが。

この原稿を書いているときに、児童文学作家の松谷みよ子氏の訃報に接した。1960年に出版された代表作『龍の子太郎』(民話ではなく、あくまでも民話を土台にした創作ではあるが)は、私も子供の頃に夢中で読んだ記憶がある。とくに印象に残っているのは、三匹のイワナを食べたばかりに龍に変身した母親の、悲しい運命とそのけなげさだ。シチリア民話の母龍とは、なんという違いだろうか。



【ラッファエツロ作 San Giorgio e il Drago】

[図版の出典] [http://www.rinnou.net/exhibition/ex\\_06.html](http://www.rinnou.net/exhibition/ex_06.html)  
<http://www.cavalliegare.it/il-cavallo-nellarte/55-san-giorgio-e-il-drago.html>

(上智大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>